様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０７０６

研究課題名（和文）大学生の言語ポートレート研究―特徴分析と作成支援アプリの開発

研究課題名（英文）A Study of Japanese University Students' Language Portraits

研究代表者
姫田　麻利子（HIMETA, Mariko）

大東文化大学・外国語学部・教授

研究者番号：５０３１８６９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：言語ポートレートは、いろいろな言語と自分の関わりをあらわす自画像である。複数の言語リソースをレパートリーに持つ人々は、相手や状況により変動するリソースの価値の見込みとアイデンティティの戦略にもとづき、コミュニケーションを工夫する。言語ポートレートは、言語リソースの価値変動のなかで経験した葛藤のふりかえりや、複層的なアイデンティティの意識化をうながすことで、そうした創造的なコミュニケーション力の発展を助ける。また移動の経験によるポートレートの変化を追う調査により、その力の発展の例示を引き出すことができる。

研究成果の概要（英文）：We discussed Japanese university students' perceptions of their linguistic resources through their language portraits -- self-portraits representing the subject's relationship with languages. While not having much experience practicing the languages that they learned, their sense of self drawn on their language portrait was limited to being a learner rather than a social agent. However, after studying abroad, they expressed new values in their languages and plural identities, which could be considered as a development toward plurilingual and intercultural competence. In participating in the language portrait activity, students are invited to realize their own value of languages that reflects their experience of otherness. Also it helps their teacher to recognize development that can be difficult to evaluate by referring to the traditional objectives of language learning.

研究分野：外国語教育

キーワード：言語バイオグラフィ　留学　移動　異文化間能力　評価　フランス語　アイデンティティ　複言語

１．研究開始当初の背景

(1) Plurilingualism

Plurilingualism という用語は、CEFR (Council of Europe, 2001)の翻訳『外国語教育の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(2004) 以来、「複言語主義」の訳語で日本でも普及した。2000 年代、「複言語主義」は、英語以外の外国語教育にとっては存在意義の新しい拠り所として、また、学校で科目として提供する言語数を多様化する主張や、その言語科目間で目標とする能力記述を共有する取組みを支える理念として、参照された。Plurilingualism は、戦争の歴史を超えて統合されたヨーロッパにおいて言語の多様性と言語権の促進を約束し、活発な人的交流と相互和解をめざすために採用された言語政策である一方、個人の複数言語使用を指す用語でもある。2001 年版 CEFR は、レベルごとの例示的能力記述文 Can do リストにおいて、単一言語使用の母語話者モデルを手放さなかったとはいえ、Plurilingualism の観点では「言語教育の目的は根本的に変更され[…]一つか二つの言語（三つでももちろんかまわないが）を学習し、それらを相互に無関係のままにして、究極目標として理想的母語話者を考えるといったようなことはなくなる」と提言されている。

(2) 母語話者基準では評価できない力

1996 年版 CEFR 改訂のための欧州評議会委託研究のひとつ、Coste, Moore et Zarate (1997/2009)によれば、「複言語・複文化能力」とは、母語話者基準から見れば断片的な言語リソース，文化リソースの寄せ集めレパートリーの中から，相手しだい，状況しだいで，アイデンティティの利益となるものを選び出し，コミュニケーション方法を調整する力である。

相手や状況しだいで自分のレパートリーの価値が変わることへの気づきや、価値変動を先読みして利益のある部分を選びだす力は、学校で教えない。地理的な移動や言語文化の移動にともない、自分のレパートリーに対して自分が抱くイメージと、表現したい自己イメージ、相手はどんな言語文化レパートリーを持っているか、また相手は自分のレパートリーをどう評価するかというイメージを総合的に判断し、アイデンティティの利益を賭けコミュニケーション方法を選ぶ経験を繰り返し、複言語使用の力をそれぞれ独学で身につけている。

２．研究の目的

従来の学校的外国語能力基準、あるいは母語話者基準で評価してこなかったこうした力の発展を認めるために、どんな方法があるだろうか。移動する子ども達が、これまでの経験や現在の使用状況等、自分の言語世界をふりかえるために、ヨーロッパやカナダで行われている取組みのひとつに言語ポートレートがある。子供向けに工夫された言語バイオグラフィの様式の１つと考えられる。自分といろいろな言語の関係を表現する描画活動である。

言語ポートレートを活用し、移動の経験により育まれる、従来の外国語能力評価基準で汲み取れない力の例示的記述を引き出せないだろうか。本研究では、外国語学習に関わる主観の自省とその言語表現化を促す方法論、日本の大学生のポートレートの特徴とこの活動を導入する利点、移動経験者のポートレートに表現される「複言語複文化能力」の例示について、検討した。

３．研究の方法

言語ポートレートは、描く活動と、描いたものを説明する活動からなる。体の形の図を配り、フェルトペンを使って、いろいろな言語との関係を表す自分の姿を描いてもらう。髪、服や靴を加えてもいい。描いた後、自分のポートレートについて説明する。描画は思考の表現化であると同時に、思考をうながすものである。思考の断片を集めながら言語ポートレートを描き、説明の中でそれらは有機的につなげられる。臨床心理の領域でも、描画は、とくに言語表現のつたない子どもの内的世界を知るために活用されることがあるが、それとは異なり、言語ポートレートの解釈は、調査者ではなく描いた者が自身で語る。語っている間にも、ふりかえりが進むことがある(Castellotti et Moore, 2009 : 52-54)。

自画像の中に描きこまれる言語イメージは、単に周囲で共有されるイメージの言い換えとはならず、学習の経緯や使用における態度、能力自己評価、将来の活用等、多くの要素を反映する。適応のために隠されている言語も表われる。複数言語リソースの相対化により、また自分との関係に特化により、従来の単一言語イメージ調査とは違った主観的意味世界が表現される。

４．研究成果

(1) 周囲の価値観への適応

日本の大学１年生のポートレートによく見られる傾向として、学校で習う外国語に対して、親しみや愛着よりも、能力評価、学習意欲、学習義務感が優先されることがあげられる。好き、楽しい、大切といった言葉よりも、勉強している、できない、勉強しなきゃいけない、うまくなりたいといった言葉が多い。将来の活用は表現されるが具体性はなく、職業的か私的領域か区別されていない。実際の使用描写も少ない。運用経験の少ない言語リソースとの関係では、学校内価値観への適応を優先し、個人的な情緒を認めにくいと言える。彼らがためらわずに親密さを表すのはほとんど第１言語（母語）だけだった。

新しく始めた言語への関心の一方で、英語の義務感でそれを抑圧しているという証言もあった。

ソビエゼク(1995)によるセルフポートレート写真の三分類、描写、夢、自己の複層性を想起しておきたい。19 世紀末、高級な室内装飾を背景に着飾った肖像写真が、経済的地位の誇示のために機能したのは、それを演出のないありのままだと見る約束があったからである。しだいにその前提の信用度は下がり、技術の発達とともに虚像を作り出す歪曲の多様なアイディアが生まれた。夢や内心の動揺を表すパフォーマンスになった。その擬装の先で、社会的期待どおりの自分と、それに居心地の悪さを感じる自分、自分の中の複層性が見つめられるようになる。

大学１年生の言語ポートレートでは、実際の学習や使用状況を描写しているものが多いが、そこに夢の領域を加えているものもある。しかし、周囲の価値観への適応義務感と独自の価値観の間の葛藤、自己の複層性にたどり着くのは少数である。

外国語教員にとってはとくに、複言語複文化能力は日常的なものにちがいない。他方、教室においてその力を明示的に目標化せず、母語話者基準を採用するなら、学生達は、その基準から見て断片的なリソースを過少評価するだろう。断片的能力の戦略的活用も「使いこなせる」の範囲であることを学ぶのは、教室外のそれぞれの経験にまかされている。教室外の使用経験が少ない学生達は、移民の子どもと同じく、学校で自明とされる価値観の中で、固有の言語の価値を認められないでいる。

(2) 学校と正統な価値観

フランスの社会学者ブルデューは、金銭に換算できなくても人からの尊敬や信用、社会での評価といった利益を生む文化的要素を文化資本と呼んだ。たとえば学歴や資格は、売買できないが尊敬や信用に加え、高収入に結びつくことのある制度化された文化資本だが、そのほか、人間関係、知識、技能、教養、趣味、言葉づかいも含まれる。ブルデューは、1960 年代後半からさまざまな調査を行ない、社会構造と人々の行為の相互依存関係を明らかにした。ひとつの社会の中では、階級やグループごとに似通った生活様式が選ばれる。どのようなものが尊敬や信用、高い収入に価する文化資本か、イメージとして共有される構造が一方にあり、正統な文化資本を所有している階級は、その正統性を守り子どもにも相続しようとする、そうでない階級は、正統な文化資本を目標にする、あるいは引き立て役を自認することで正統性の承認に参加するという行為がもう一方にある。近代の学校は、階級の差別なく正統な文化資本を身につけさせ、社会的地位上昇の機会均等を保障する制度であると同時に、社会で正統とされる価値と共謀する関係にある。ブルデューは、フランスではパリに生まれてパリ風のアクセントを持つ人は学校でよい成績を得られ、その成績が給料の額につながるという例をあげていたが、学校は「ある者は正統的慣習行動をおこなう者として評価の高い位置づけへ、またある者はこれをおこなわない者として評価の低い位置付けへと振り分けていくことにより、彼らの抱いているさまざまな希望や要求、自己イメージや自己評価を操作」する場である(1990 :41)。だから、外国から来た子どもや同じ国の別の地方から来た子どもの多くは、新しい社会や学校では、前にいた所で覚えた言語や家庭で使っている言語が低い評価を受けることを敏感に感じとり、それを隠す。

日本の大学１年生の言語ポートレートのなかにも、日本語が、周りの日本人に溶け込むために身にまとうもの、母親の国で生まれたことや自分の国籍が父親の出身国にあること、家のなかに別の言語があることを隠すためのものとして表現されたものが見つかる（図 1)。

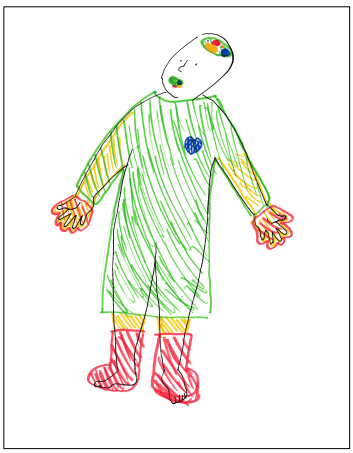

図 1

学校は、個人の経験と固有のアイデンティティに即した言語資本全体の発展を支援しにくい制度である。Coste, Moore et Zarate(1997/2009)は、複言語複文化能力を定義するなかで、１つの社会の正統な価値観への参加から逃れ、他者と関わる能力を重視する。

(3) 移動の経験とポートレートの変化

１ヶ月に満たない短期留学の後でも、言語ポートレートには変化があらわれる。「うまくなりたい」「勉強している」「勉強したい」という表現が、「使っていろいろなことをしてみたい」「話せる」という表現に替わる。学校的価値観から独立し、現在の自分と言語との関係、すなわち言語レパートリーの新しい価値を積極的に認めるようになる。「学習者」としての自画像が、部分的能力を活用して行動する「社会的行為者」の自画像に変わる。断片的な言語文化リソースの戦略的な活用は、自分の持つ言語文化レパートリーについて、周囲で一般的な価値観に距離を置き、レパートリーに関する固有の価値を見つけることにより、推進される。

言語ポートレートは、個人的な言語価値の

意識化をうながす場であり、また同時に、その意識化の結果を証明するツールとして活用できる（図 2）。

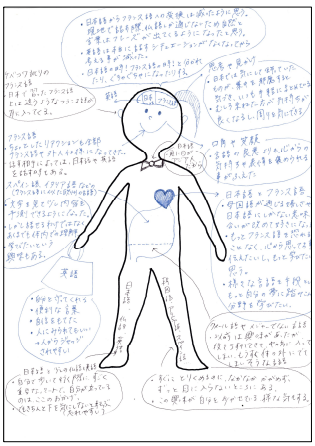

図 2

約１年の長期留学の後では、言語の種類や体の部位の意味づけにも変化が見られた。留学後は、相手による言語の使い分け、言語的正確さより気持ちを伝える力といったコミュニケーション戦略上の価値と、他方、自信や愛着という情意的な価値が意識化され、習熟度や夢は後景となる。言語の価値が複層化する。

アイデンティティも複層化する。ある言語ポートレートでは、留学先で外国人扱いされること、日本人のステレオタイプとして見なされることに対する否定的な感情を経て、日本人性を「公の個性」という取り外し可能なものとして引き受けるようになる変化が表現された。アイデンティティを使い分け、期待される自分の属性を演出する態度を身につけている。

Anquetil (2006)は、留学で得られる異文化間コミュニケーション能力の１つとして、「外国で出会った人が自分の出身国に抱くイメージの一部に賛成し、安心させる」という項目をあげている。また、「外国人」として扱われることをしだいに受け入れるようになったという移動経験者の証言は、川上(2010)や、Coste ら(1997/2009)が論考のおわりに掲載したインタビュー報告にも見つかる。留学送り出し側の外国語の教室では、目標文化に関する知識を重視する一方、こうした態度については、独学にまかせてこなかったか。外国語教育は、言語文化間をつなぐ人の育成をになうはずが、むしろ境界を強調してきた。グローバル化の進む今日、周辺あるいは間（あいだ）にいるという「独特なストラテジー（Coste *et al*.1997/2009 : 17)」の承認まで、外国語教育の範囲を広げられるのではないか。

また、他者経験という資本の発展は、家族の文脈において考察することもできる。移民の第１世代が、次世代の社会的移動のために移動先の社会での正統性と、他者経験という資本の価値を同時に認め、その間の交渉をする力は、次世代において、正統性から逃れていることのより明確な価値化として発展する。

(4) 複数性について

複言語複文化能力とは、複数の言語文化リソースが単に併存するレパートリーからコミュニケーション上有効なものを選ぶ運用ではない。価値観のあいだの行き来やアイデンティティの交渉により創出されるものである。その発展は、地理的、言語的、文化的移動のなかでつくられる複層的な自己イメージの発展と言える。(Zarate, Lévy et Kramsch 2008 ; Kramsch, 2009)

ただし、言語の名前や区別は、じつは政治的な力学と恣意的な分類、選別の結果である。二言語家庭の子どもが、レパートリー全体をひとつの言語と考えていて、学校で初めて自分は二言語使用者だと知るケースも報告されている(Makoni and Pennycook, 2012 : 445)。「二言語」と数えるのは、従来の言語学的見地でしかない。人々の言語レパートリーに複数の構成要素を数えて「複言語」と呼ぶこと自体、正統な制度に与することになる。この制度を超えて多様なアイデンティティを育成する方法がたしかに求められている。

言語ポートレート調査のなかでも、同じ位置に二言語を重ねて描いたあとで、「分けることはできない、レパートリー全体でひとつの自分の言語」と言う学生もいた。

言語ポートレートの指示を工夫しても、調査者に対する説明では社会的な価値観に則した言語の名前が優先される。さらに自由な発想の表現を受けとめる言語バイオグラフィ・デザインを考えている。

＜引用文献＞

① Anquetil M. (2006). *Mobilité Erasmus et communication interculturelle*. Berne, Peter Lang.

②Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press ;吉島茂,大橋理枝他訳編(2004).『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』, Goethe-Institut Tokyo, 朝日出版社.

③Coste, D., Moore, D. et Zarate, G. (初版 1997 ; 改訂版 2009). *Compétence plurilingue et pluriculturelle*. Strasbourg, Conseil de l'Europe.

④Kramsch, C. (2009). *The Multilingual Subject. What Foreign Language Learners Say about their Experience and Why it matters*. Oxford University Press.

⑤ Makoni, S. and Pennycook, A. (2012). Disinventing multilingualism. In Martin-Jones, M., Blackledge, A. and Creese, A. *The Routledge Handbook of Multilingualism*. New York, Routledge, pp.439-453.

⑥Moore, D. et Castellotti, V. (2014). Dessins

d'enfants, recherche qualitative, interprétation. In Blanchet, Ph. et Chardenet, P. (dir.), *Guide pour la recherche en didactique des langues et des cultures*. Paris, Éditions des archives contemporaines, pp.166-179.
⑦Zarate, G., Lévy, D. et Kramsch, C. (dir.) (2008). *Précis du plurilinguisme et du pluriculturalisme*. Paris, Éditions des archives contemporaines.
⑧川上郁雄(2010).『私も「移動する子ども」だった』くろしお出版.
⑨ソビエゼク, R. A. (1995).「セルフポートレイトの中のもうひとりの私」『カメラアイー写真家たちのセルフポートレイト』淡交社, pp.20-32.
⑩ブルデュー，P. (1990).『ディスタンクシオン I』藤原書店.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

①姫田麻利子「移動の経験という資本」*Les lettres française*, 査読あり, 38, pp.1-12, 2018.

②姫田麻利子「言語ポートレートと評価」アウリオン叢書（言語と教育、文学と教育）, 査読あり, 19, pp. 1-14, 2018年.

③HIMETA, Mariko, Le portrait de langues et l'identite d'apprenant, In Suzuki, E., Potolia, A. *et al.* (dir.), *Penser la didactique du plurilinguisme et ses mutations*, 査読あり, Presses universitaires de Rennes, pp.128-137, 2018 年.

④HIMETA, Mariko, Évolution du portrait de langues après la mobilité étudiante, *Revue Japonaise de Didactique du Français*, 査読あり, Vol.12, pp.169-180, 2017 年.

⑤姫田麻利子「言語ポートレート活動について」, *Etudes didactiques du FLE au Japon*, 査読あり, 25, pp.62-77, 2016 年.

⑥姫田麻利子「間を見つける力―外国語教育と異文化間能力」，西山教行，細川英雄，大木充編『異文化間教育とは何か』くろしお出版，査読あり, pp. 118-140, 2015 年.

〔学会発表〕（計９件）

①姫田麻利子「移動の資本について」上智大学フランス語フランス文学会, 2017 年 11 月 18 日.

② MARSHALL, Steve, MOORE, Daniele, HIMETA, Mariko, « Plurilinguismes et francais dans une universite anglophone au Canada », IVe Congres regional de la Commission Asie-Pacifique, FIPF（京都大学）, 2017 年 9 月 21 日.

③HIMETA, Mariko, "How do language teachers identify themselves as intercultural mediators while supporting students' mobility?" (Symposium Intercultural Mediation, REN 4), AILA, World Congress Rio 2017, 2017年7月25日.

④姫田麻利子「新しい社会のアイデンティティ戦略―応える、見やぶる」第３回移動とことば研究会（早稲田大学）, 2017 年 4 月 15 日.

⑤姫田麻利子「言語ポートレートと複数言語使用」日本フランス語教育学会2016年度秋季大会（金沢大学）, 2016年10月16日.

⑥ HIMETA, Mariko, « Le frein des autostereotypes dans le cadre de la mobilite », Colloque international : *The Near and the Far: Teaching, Learning and Sharing of Foreign Cultures*（主催PLIDAM, フランス国立東洋言語文化学院, パリ），2016年6月9日.

⑦ HIMETA, Mariko, « Temoigner de sa competence en mediation interculturelle », Journée d'étude : *Intercultural mediation and Teaching and Learning languages and cultures*（主催PLIDAM, フランス国立東洋言語文化学院, パリ），2015年06月12日.

⑧姫田麻利子「複言語複文化能力と言語バイオグラフィ」第22回早稲田こども日本語研究会, 2015年3月12日.

⑨HIMETA, Mariko, « Le portrait de langues et l'identite d'apprenant », Colloque international : *Policy and ideology in language teaching and learning: actors and discourses*（主催 PLIDAM, フランス国立東洋言語文化学院, パリ），2014 年 6 月 11 日.

〔その他〕
ホームページ
http://www.ic.daito.ac.jp/~himet/

６．研究組織

(1)研究代表者
姫田　麻利子（HIMETA, Mariko）
大東文化大学・外国語学部英語学科・教授
研究者番号：５０３１８６９８

(2)研究協力者
大久保　成（OKUBO, Naru）
大東文化大学・文学部・非常勤講師